

かみす

Pick up

▶市長・議長から
新年のごあいさつ



まちの
魅力再発見

漕出式

新年に海の安全と豊漁を祈願



大漁旗を掲げ正月の乗り初めを待つ漁船。新年の風物詩である漕出式は、漁師の仕事始めにあたります。海上から手子后神社や川口神社(銚子市)を望み、お神酒やお米をまいて船を清め、一年の操業の安全と大漁を祈願します。1月初旬の縁起の良い日に、今年も執り行なわれる漕出式を紹介します。

AR 広報かみすが
動き出す



[COCOAR2]



アプリをダウンロードし
表紙にスマートフォンを
かざしてください。
詳細は16ページ



漕出式

新年に海の安全と豊漁を祈願

漁師町ならではの新年の風物詩といえば「漕出式」。波崎漁港に大漁旗を掲げた漁船が集結し、次々と出港していく姿は壮観の一言です。今回は漕出式を中心に、知るほどに興味があふくらむ神栖市の漁業に迫ります。



川口神社(銚子市)



手子后神社



漕出式の朝

新年に安全と大漁を願って

大自然を相手にする漁業。その昔、手漕ぎの和船で漁をしていたころ、漁師の仕事は危険と隣り合わせでした。そのため、漁の安全や豊漁を願って縁起担ぎをする風習が、今も数多く残っています。その一つが新年に行なわれる漕出式です。これは「乗り初め」とも呼ばれ、漁師の仕事始めにあたるもの。1月5日から7日ごろの良い日を選んで行なわれるのが習わしです。

漕出式の準備は年末に始まり、その年の最後の漁を無事終えると、船を掃除し大漁旗や若松を飾ります。そして年が明けると、漁師たちは手子后神社に参拝します。

漕出式の朝、一番先に港を出ることを「ナマキリ」といいます。ナマキリ船は運が強すぎて事故などの災いがもたらされるとされ、どの漁師も先を譲ろうとしました。そのためくじ引きで決めるようになり、最近では順番に務めています。そのナマキリ船を先頭に、まき網船団が連なって出港。新春の海に、色鮮やかな大漁旗がはためきます。

船が向かうのは、銚子市の川口神



波崎漁港を出港するまき網船団



海上での儀式を執り行ない波崎漁港へ戻る



まき網船の船首



船が川口神社近くの海上へ向かう

社。海の上から神社を仰ぎながら、船に祀られた御船様や船首にお神酒やお米をまいて船を清め、取り舵回り(左回り)に旋回しながら今年一年の操業の安全と豊漁を祈願。そのまま初漁に出る船もあれば、港に戻る船もあります。

代々伝わる流儀を守る小型船

まき網船団に続いて、小型船が海へと繰り出します。漕出式の手順はほぼ同じですが、小型船にはそれぞれの家に伝わる流儀があるとのこと。そこで、小浜史久さん・幸江さん夫妻に詳しく教えてもらいました。小浜さんは祖父の代から続く漁師の3代目。第一小浜丸をはじめ3隻の小型船を所有し、ヒラメ、カレイ、伊勢エビ、カツオ、シラスウナギなどの漁をしています。

「漕出式は物心ついた頃から見てきましたよ。18歳で漁師になり、翌年の正月に親父に教えてもらいながら初めて漕出式に出ました。毎年や



小浜さん夫妻



「大漁旗を掲げて手子后神社と川口神社に向かい、漕出の儀式をする」と語る小浜さん

るのが当たり前だから、特別な行事という意識はありません。それでもやはり漕出式をやる、今年も一年が始まるんだな、という気持ちになりますね」と話す小浜さん。

漕出式の準備を支えてきたのは妻の幸江さんです。「嫁いできた時から、年末には毎年30キロのもち米を炊いてお供え餅をたくさん作ります。お正月用の若松を準備するのも私の役目。一夜飾りを嫌うので、12月30

日までに準備を整えて船にお供えしてもらい、新年を迎えます」

いよいよ漕出式の日、波崎漁港を出てからの動きが、まき網船団とは異なります。「川口神社へ向かう前に、利根川の明神下で漕出の儀式を

します。海水をすくって船の柱にかけ、次にお神酒をかけて清める。そして、うちでは手子后神社の前で右回りに3回旋回し、次に川口神社前でも同じようにお清めをして左回り

に3回旋回します」と小浜さん。回る方向やお供え物など、船によって細かい違いはあるようですが、代々受け継がれてきた方法を大切に守っています。

実は個性豊かな大漁旗

大漁旗を掲げた漁船が見られるのは、漁で獲物が多いときのほかには漕出式や手子后神社の鎮守祭、大潮祭など、ごく限られたときだけです。大漁旗というと、めでたさがあふれる大胆で色彩豊かな図柄が思い浮かびますが、いつ、どのように作られるものなのか小浜さん夫妻に聞いてみました。

「大漁旗は新船の進水式にお祝いとして贈られるもので、うちは親戚が多く付き合いが広いので何十枚もいただきます。船の大きさによってサイズは決まっていますが、色や柄は自由。恵比寿様、宝船、鯛など縁起の良い図柄が多く、ほかにはマグロや伊勢エビ、変わったところでは人魚とかもありますよ。カラフルなものだけでなく近頃は一色の大漁旗もあって、かえって目立ちますね」

潮風や海水を浴びて傷んだら、別の大漁旗を出して飾ります。それでも全部は飾りきれませんが、新船の

祝いに大漁旗を贈り合う風習は受け継がれてきました。漕出式は、個性あふれる大漁旗を一度に見られる絶好のチャンスです。

漁師の願いと技術の進歩

手子后神社の鎮守祭(旧暦2月1日)には出漁しない、不漁が続くと間直まなぢしという縁起直しの酒宴を開く……。漁師町には、海難を逃れるためのたくさんの風習があります。その一方で、昔に比べ漁業はとても安全なものになったと小浜さん夫妻は言います。

「風の強さや風向きなど、ピンポイントで正確に予報できるようになったので、何時まで安全に漁ができるかわかるし、海が荒れるなら無理して漁に出ることもありません。漁船のハイテク化が進んで、うちの船が何ノットでどのコースを進み、今どこで漁をしているのか、全部わかるようになっていきます」

さまざまな技術の進歩に支えられ、漁業の安全が守られています。

歴史ある波崎漁港

波崎漁港の起源は江戸時代中期まで遡り、利根川河岸に自然発生した



全国有数の漁獲量を誇る波崎漁港

とみられています。一説によると、魚を追って北上してきた紀州漁師の影響で、波崎や銚子の漁業が発展。1672年に銚子の飯沼村で干鯛場ほしかばの税金が値上がりしたため、怒った漁師が大挙して波崎に引っ越し、大きな漁村になったと伝わります。

明治時代中頃には、イワシやサバを効率よくとることのできる漁法を導入。大正期に漁船の動力化が進むと、漁場は仙台沖まで拡大しました。波崎漁港は、昭和8年ごろから岸壁などの整備が進み、昭和26年から

未来への希望が持てる漁業に

約20年にわたる整備事業で、ほぼ現在の姿となります。そして昭和60年に波崎新漁港が開港。漁業の近代化が進み、日本を代表する大中型まき網漁業基地へと成長しました。

漁業の現状について、はさき漁業協同組合総務部長の宮本聡さんは次のように語ります。

「海では25年から30年の周期で魚種交代が起こっているようです。はさき漁協に所属するまき網船団は、

サバ、イワシ、アジなどをとっているのですが、現在は主にサバの漁獲が好調です。最近イワシも増えてきているようですが、アジは不漁です。近年、サンマの不漁が騒がれていますが、自然相手であり、



宮本さん

漁場はいつも同じとは限りません。さまざまな要因が漁獲量に影響を及ぼします。そんな中で、未来への希望がもてる要素もたくさんあります。安定した漁業に向けて資源管理を行ない、乱獲を防いでいること。リーダーやソナーなど最新技術の導入により効率的な操業ができること。若い後継者がいることです。また、組合としては、漁業を支える国の補助事業を活用し、もうかる漁業、がんばる漁業へ向けて意欲的に取り組んでいます。」

加えて、新しい取り組みに挑む漁師がいます。小浜さんもその一人で、新鮮な魚を直接契約して販売する「自家出荷」を実施。「伊勢エビを丁寧を選別したり、いけすでヒラメを生かしておいたりして、市場ニーズ

を見極めて豊洲市場などへ出荷します。魚をとる楽しみに売る楽しみが加わりました」と、小浜さんは明るい表情を見せます。

神栖市の漁業の最大の魅力は、黒潮と親潮がぶつかる沖合に良好な漁場が広がること。はさき漁協に所属するまき網漁業船団の漁獲量は、全国トップクラスを誇ります。また沿岸漁業も盛んで、ヒラメ、カレイ、ホウボウ、伊勢エビなど魚介の宝庫。今も昔もこれからも豊かな海の恵みは、私たちにとってかけがえのない財産です。

